

---

## 《研究発表1》 「朝鮮の白磁—君子志向」展、新たな鑑賞者層のための展示演出

李 準光 (韓国、リウム美術館)

2023年2月28日から5月28日まで、韓国・ソウルのリウム美術館では「朝鮮白磁、君子志向」展を開催した。この展示は、2004年のリウム美術館開館以来初となる陶磁器の特別展で、約500年にわたって製作された朝鮮白磁をまず装飾技法と需要層で分けた。そのうえで白磁には、朝鮮の人々が理想的儒教的人間像と考えた「君子」のイメージが込められているという解釈を加え、構成した。

本展示では、古美術を「学習」の対象と考える人々に魅力を伝えること、具体的には若い来館者層を古美術愛好家として定着させ、長期的な鑑賞者層に取り込む目標をうち立てた。目標を達成するうえで、コンテンツとなる白磁のクオリティ、そして白磁を目立たせる新しい演出が必要であった。そのため韓国で国宝・宝物に指定された朝鮮白磁の半数を1ヶ所に集め、初公開作品、そして韓国では容易に見ることができない日本所在作品も紹介した。

これらのコンテンツは、本発表のテーマでもある「演出」が加わることでその価値を増幅させた。立体物の白磁を十分に鑑賞できるよう、全ての作品を360度から鑑賞できるように配した。また最初の展示空間である「ブラックボックス」では、極度に暗い空間のなかで白磁を強調する照明をおこない、集中力の高い入場時にスペクタクルな第一

印象を受けるよう工夫した。また通常より10cmほど高く作品を設置し、国宝・宝物の威厳が強調されるようにした。また上部に照明のボックスがないショーケースを用いることにより、来館者の視野を妨げる要素を排除し、暗く漠然とした天井と星のような照明が調和をなすようにした。また展示会場の奥には階段を設置し、全体のシーン(Scene)を眺望できるよう工夫した。

つづく第二の展示空間「グラウンドギャラリー」では、「ブラックボックス」とは異なり、明るく穏やかな雰囲気を漂わせ、来場者が活気づくよう演出した。また集中が散漫になりかねない6.1mの高さを生かすため、演出と空間照明を兼ねた装置を準備した。そして陶磁器により親しみを持ってもらえるよう、安全な距離を考慮しつつ、露出展示を試みた。そして最後にリノベーションを絶えずおこなっているリウム DID(Digital Interactive Display)を活用し、陶磁器の文様を展開する演出もおこなった。

これからも国内外の様々な機関と交流・連携しつつ、新たな鑑賞者層のために実験的な展示演出を試み、古美術展示のアップデートを図っていきたい。

翻訳：田代 裕一郎(東京文化財研究所)

---

## 《研究発表2》 上海博物館東館陶磁館に関する基本情報の紹介とその展示理念

彭 涛 (中国、上海博物館)

1. 東館陶磁館に関する基本情報の紹介  
本展示は上海博物館にあった「中国古代陶磁館」

の展示体制を基礎に、数十年にわたる新たな学術研究成果と考古発見を加え、さらに上海博物館の

新収蔵品や再整理した収蔵品の増補、修正、拡充も行った。本展示は中国古代陶磁史の「通史」といえるものであり、時代順に7つのテーマに分け、中国古代陶磁器の誕生、発展、繁栄の全過程を示すことを目的としている。

本展示は主に3つの趣旨に沿って展開している。

趣旨1：中国古代陶磁器の発生、発展、変化、進歩の全過程を示す。

趣旨2：芸術史の角度から、古代陶磁器の美しさを示す。

趣旨3：最新の展示方法を多く用いることで、社会史や文化史の角度から、陶磁器の背景にあるストーリーを語る。

## 2. 東館陶磁館の展示理念

展示のスタイルについては、本来あった展示の枠組みを刷新するよう努力し、伝統的な制約を打ち破ることで、新たな展示理念の構築を試みている。私たちの目標は、高度に芸術的かつ最新式の展示空間を作り上げ、来館者に現代アートの雰囲気にあふれた環境で古代陶磁芸術を鑑賞していただく

ことである。古典の美と現代の美を完全に調和かつ統一させ、来館者が文物を鑑賞すると同時に、時代の変遷と文化の伝承についても感じていただけるようにする。

また、「文物自身に語らせる」という理念を守り、展示室を現代的でシンプルなスタイルにしつつ、芸術性を失わないようにしている。さらに、来館者により豊富な鑑賞体験をしていただけるよう、マルチメディアを使った展示とコミュニケーションのコンテンツを適宜増やし、古代芸術と現代テクノロジーの完全な融合を実現させる。これらの方法を行うことで、来館者には以前の博物館とは異なる芸術鑑賞と観覧体験をしていただくことができる。

さらに、文物の観賞効果、とくにライティング効果を重視することで、できる限り鑑賞の妨げになる要素を減らす。そして、来館者それぞれが好きな作品を細部まで鑑賞できるようにし、陶磁芸術の美を深く感じていただきたいと考えている。

翻訳：新井 崇之（町田市立博物館）

---

## 《研究発表3》 佐賀県立九州陶磁文化館 常設展「有田焼の歴史」

### 展示リニューアルについて（2022）

藤原 友子（佐賀県立九州陶磁文化館）

佐賀県立九州陶磁文化館は、陶磁器を専門とする佐賀県立の博物館施設として昭和55年(1980)に設立された。

展示室は5室あるが、今回のリニューアル（2022年4月9日より公開）によって第1展示室を刷新した。この展示室は、これまで「九州陶磁の歴史」と題した展示室であった。しかし、今回のリニューアルでは視点を変え、テーマを「有田焼の歴史」とした。その理由としては、資料収集に最も成果

があったのは有田焼を中心とした肥前磁器に関するものであり、開館時の学芸課のメンバーであった大橋康二名誉顧問をはじめ、有田町教育委員会による発掘調査等による新知見を盛りこむべきと考えられたことと、「まずは有田焼のことを知りたい」という、博物館を訪問する来館者の要望と来館動機に応えたものである。有田焼の歴史の新しく正しい情報を提供することによって、九州陶磁と東洋陶磁への関心を誘うことを期待した。

展示構成は、有田が辿った象徴的な歴史事象を抽出し、年代順に章仕立てに整理した小部屋に分け、その部屋に入るごとに感覚的にも時代が変わっていったことを体感できるデザインになっている。当館の学芸員に担当する者を割り振り、会議を重ねて展示内容やデザインを具体化していった。また、グローバル化した今日の観光需要に応えるために、すべての日本語解説は英語を併記した。

受付の照明と什器のレイアウト、展示室の番号表示、液晶モニターによるサイネージの設置、LED

照明への転換など、これまでハード面で課題を抱えていたこともあわせてリニューアルによって解決した。

デジタル機器など展示効果を高めるための映像は全部で6種類あり、プロジェクションマッピング、歴史解説スライド、アーティストなどのインタビュー映像、伝統的な職人技の映像、デザイン体験などそれぞれ異なるものが設営された。動きのある展示があることで鑑賞者の関心をひきつけ、より理解しやすい効果が得られている。

---

《研究発表4》 バックヤードと表舞台を入れ子にする：

### 「のこす、伝える—「お宝」考今昔」展（茨城県陶芸美術館 2008）

花井久穂（東京国立近代美術館）

展覧会は、ある秩序のもとにモノを陳べなおす行為である。「のこす、伝える—「お宝」考今昔展」（2008年1月24日—、茨城県陶芸美術館）は、「箱や発掘陶片等の周辺資料と作品を同時に展示し、作り手と鑑賞者相互の結びつきで成り立ってきた日本のやきもの文化を再考する」というテーマで企画した展覧会である。通常はバックヤードに仕舞われている伝世品の箱や仕覆といった周辺資料、地中に廃棄されていた発掘陶片—それら「作品未満」の「資料」と「作品」、あるいは「前近代」と「近代」を入れ子状に配置する、という展示の試みであった。

過去の遺物は「現在」においてどのような効力を持つのか、という問いがはじまりにある。当時、私の職場が「重要無形文化財」保持者、いわゆる「人間国宝」作品を収集の柱とする近代陶芸の専門館だったという事情もあった。彼らの作品の多くは、ある特定の時代や地域の古陶磁を発想源にしている。陶磁史形成期における古陶磁の受容は、近代の陶芸家たちの「つくる」という創造行為と

相関関係にあった。発掘という領域は昭和戦前期においては未だ発展途上で、担い手も「プロ/アマ」・「学問/趣味」の境界が曖昧だった。現在の科学的発掘の成立以前であるが故に、採用されることのなかった「日本陶磁史」が幾つもある。

展示構成は、「伝世」・「発掘」・「わざの伝承」という3つの章から成っている。伝世品（茶道具を扱う古美術専門館）／出土遺物（発掘資料を扱う博物館）／近代作家の作品（「芸術作品」を扱う近代美術館）—それは、扱うモノの分野の異なる「美術館／博物館」の枠組みそのものであり、陶磁史の形成とともに分化してきた専門領域といえるだろう。

通常交わりあうことのない「古美術品」と「資料」と「作品」を地続きの空間に陳べると、当然、ある種の軋みや揺れが生じる。例えば、キャプションや作品リスト作成の際に生じる「言語」の統一問題。展示の序列。「展示」の現場においては欠かせない基礎的な作業の途上で、様々な差異が壁となってあらわれる。異物を隣り合わせる時ほど、

それらが通常置かれている「場」(所蔵者)の思想や研究(専門性)の骨格といったものを、雄弁に語りだす瞬間はないのだ。モノの背後にある歴史を解きほぐし、編み直す「展示」は、分化の過程で見

えなくなっていくものを再び手繰り寄せる契機でもある。「展示」の場において、思いがけず出会った幾つかの事例を紹介したい。

---

≪研究発表5≫ 「1964 証言— 現代国際陶芸展の衝撃」(岐阜県現代陶芸美術館 2017)

花井 素子(岐阜県現代陶芸美術館)

昭和39年(1964)の東京オリンピック開催を機会に、企画され、1964年から65年にかけて国立近代美術館(東京・京橋)、石橋美術館、国立近代美術館京都分館、愛知県文化会館美術館を巡回して開催された「現代国際陶芸展」(朝日新聞社)は、日本で初めての国際陶芸展として世界各国の陶芸を一堂に集めて紹介したものであった。同展は、開催当時、「日本陶芸の敗北」と評されるほどの衝撃を、日本の陶芸界に与えたとされている。2017年に岐阜県現代陶芸美術館で開催した本展覧会では、海外陶芸との出会いにより大きな刺激を受けた日本陶芸の1960年代の動きに注目し、「現代国際陶芸展」が与えた影響を検証した。

同展開催当時、作家や人々が展覧会場で「何をみたのか」「どのように受け止めたのか」を知るため、同展の出品作や資料の調査、出品作家や同時代の作家の聞き取りを行い、展覧会では、出品作品及び同時代の作品を核に、資料とあわせて再現的に紹介することを目指した。また、同展で紹介

された海外の陶芸作品は、欧米各国を旅して作品を集めた小山富士夫の眼を通して選ばれたものであった。このことは同展の検証において注目すべき点であり、その調査旅行の記録も紹介した。

本展覧会を開催したのは、「現代国際陶芸展」開催からおおよそ50年を過ぎた時期である。1960年代の「現代陶芸」が歴史となりつつあるなかで、この間に陶芸界には様々な動きが生まれ、作家や研究者にも新たな世代が増えてきた。「現代国際陶芸展」の時代を知る者が少なくなっていくなかで、今日の私たちがそれを知る方法として企画したのが本展覧会のきっかけである。展示を通じて時代を共有し、検証できる場をつくりだしたいと考えた。一方で、実際の展示においては、その高揚した時代の空気を伝える難しさも感じた。

今回の発表では、本展覧会で伝えようとしたことや課題として見えてきたものなどにも触れながら、この展覧会での取り組みを報告したい。

---

≪研究発表6≫ 古陶磁鑑賞の理想的環境を求めて

— 大阪市立東洋陶磁美術館の展示の理念と特色

小林 仁(大阪市立東洋陶磁美術館)

大阪市立東洋陶磁美術館は昭和57年(1982)に

開館した陶磁器専門の美術館である。この美術館

は住友グループ 21 社から大阪市に寄贈された、いわゆる「安宅コレクション」の東洋陶磁のためにつくられた施設である。安宅コレクションとは、大阪に本社があった戦後十大商社の一つにも数えられた安宅産業株式会社が、会長の安宅英一氏の主導のもと収集した約 1,000 点の中国陶磁と韓国陶磁を中心とした東洋陶磁コレクションである。安宅英一氏の透徹した審美眼によるそのコレクションは、当時から世界的にも評価が高いものであった。

ところで、安宅氏はコレクションの見せ方、すなわち展示についてもその鋭敏な感性により徹底したこだわりを持っており、当館初代館長である伊藤郁太郎名誉館長のいう「1mm 単位のディスプレイ」など当館の展示の DNA として継承されている。当館の展示室は、まさに安宅コレクションを最も美しく、魅力的に見せるために設計されたものといえる。その展示理念は、1) 博物館ではなく美術館として作品鑑賞重視の展示、2) 東洋の古陶磁を美術品としてみせる展示、3) 陶磁器を最善な環境で鑑賞してもらうための空間、ケース、照明、配置などの細かな工夫、ということができる。

開館当初の大きな目玉となったのは、展示ケー

スに天窓から自然光を採り入れた「自然採光展示」である。当時世界で唯一であったこのシステムは今なお世界で唯一無二の展示方法であり、季節ごと、そして時間ごとに柔らかな自然の光のもとでみる青磁の色合いは格別である。陶磁器展示においても開館以来こだわってきた。10 年ほど前には陶磁器本来の色や質感を鑑賞できる当時最高レベルの高演色の LED 照明を採用した。また、陶磁器展示における最大のリスクである地震対策についても、優れた免震性能をそなえ、かつ作品鑑賞のさまたげにならない独自の免震装置の導入にいち早く取り組んできた。

昨年、40 周年を迎えた当館は、老朽化という現実にも直面しているが、自然採光展示や LED 照明、展示クロス、独自の手すりなど、東洋陶磁の鑑賞環境という意味では、今なお世界有数であると自負している。今回のリニューアル休館期間においては、限られた予算の中で、老朽化対策をはじめ様々な機能のアップデートを図っている。陶磁器の理想的な鑑賞環境をつねに模索し、陶磁器本来の魅力を引き出す工夫こそが、大阪市立東洋陶磁美術館の展示の最大の特色なのである。

---

## ≪研究発表 7≫ 昭和戦前期の中国における日本人陶磁学者の

### 古窯址の探索と陶片の採集について

木田 拓也（武蔵野美術大学）

昭和戦前期の 1920 年代から 30 年代にかけて、中国陶磁のコレクションが欧米や日本で形成されたが、それと並行して、中国陶磁の研究活動も盛んになった。日本の陶磁学者の活動範囲は中国大陸にまで広がりを見せ、中国の古窯址の探査に取り組む陶磁学者も現れた。古窯址の探索と陶片採

集の主たる目的は、文献の上で名称だけが伝えられているものの、その実像が分からなくなっていた中国陶磁の正体を明らかにすることにあつた。古い文献の記述を手がかりとしながらも、その記述内容をうのみにするのではなく、科学的なまなざしで検討すること、実証的に検証することがこ

の時代の陶磁学者の課題だった。古い文献に記述された窯の実在性を検証し、焼成窯の所在を明らかにするという基本的な課題があった。たとえば、青磁の源流に位置するはずの越州窯、宋代に官製の窯で作られたとされる官窯など、当時は、まだその焼成窯の所在が明らかではないものがいくつもあった。そのため、中国陶磁に関心を抱いていた当時の陶磁学者たちは、古窯址の在処を突き止め、陶片を採取し、その陶片を手掛かりとして、そ

の正体をあきらかにするという基礎的な課題にまず取り組む必要があった。1920年代から30年代にかけて、中国大陸を探訪し、古窯址の探索や陶片の採集に取り組んだ日本人としては、小森忍、中尾万三、米内山庸夫、松村雄蔵、大谷光瑞らがいる。昭和戦前期の中国で、古窯址を探索した日本人陶磁学者の足跡を追跡しながら、陶磁史研究史のなかの陶片について振り返りたい。

---

≪研究発表8≫ 『陶片から学ぶ』シリーズ（根津美術館 2020～22）

下村 奈穂子（根津美術館）

根津美術館は、昭和20年（1945）に解散した東洋陶磁研究所より多数の陶片資料を譲り受けた。以降、主に受贈によって、陶片の蒐集を進めた。本発表では、それらを当館2階の展示室5で3回に分けて展示した「陶片から学ぶ」を紹介するとともに、美術館における陶片展示の課題と対策、また可能性について検討を加えるものである。

展示の目的は、これまで紹介する機会の少なかった館蔵の陶片資料を周知することであった。1回目は「陶片から学ぶ—中国陶磁編—」（2020年9月19日～11月3日）とし、越窯、定窯（澗磁、燕川）および鉅鹿と鎌倉で採集された陶片を展示した。2回目は「陶片から学ぶ—朝鮮陶磁編—」（2021年9月11日～10月17日）とし、山田萬吉郎と浅川伯教が朝鮮半島で採集してきた陶片を展示した。そして、最後の3回目は「陶片から学ぶ—日本陶磁編—」（2022年9月10日（土）～10月16日（日））とし、御室窯、高取（山田窯、小石原鼓窯）、肥前（小溝窯、百間窯、楠木谷窯、掛の谷窯）、現川窯、薩摩（串木野窯、豎野冷水窯）、板谷波山の陶片を展示した。これらは、所蔵する陶片の中から、資料数や来歴の正確さなどによって選び出し

たものである。

美術館で陶片を展示するにあたって懸念されたのは、「割れたもの」に対して一般の来館者の方が持つマイナスイメージや、多数の資料が並ぶことによる「飽き」である。そこで、本展覧会では「陶片を鑑賞する」というよりむしろ「陶磁器を学ぶための資料として陶片を見る」という姿勢で展示した。これがタイトル「陶片から学ぶ」につながった。実際の展示では、器具を工夫し、解説のタイミングや量を調整するなどして注目して欲しいポイントを目立つようにした。また関連する完形品を併せて並べることで、陶片の原形がイメージとして膨らむようにした。

3回を終了し、「難しかった」「よくわからなかった」という感想もあったが、全体としては、完形品の展示では見ることのできない高台や底部の目痕・糸切、窯印、断面の胎土や釉薬の厚さなどを初めて見て面白かった、という意見が多く寄せられた。このような楽しさを提供することこそ、美術館で陶片を展示する意義と思われた。陶磁器研究の醍醐味と言える陶片資料であるが、まずは見る人を楽しませる展示を心がける必要がある。

---

## 《研究発表9》 ミュージアムにおける陶片資料の活用—東京国立博物館の陶片紹介—

横山 梓（東京国立博物館）

東京国立博物館（東博）には、窯址出土陶片資料として、(1)「列品番号」がつけられて収蔵品となっている一群と、(2) 採集後未整理のまま保管されている一群の、大きく分けて2種類が存在する。

前者の代表的な例としては、いわゆる「米内山陶片」と呼ばれる、杭州領事をつとめた米内山庸夫氏によって採集された中国越州窯址出土陶片、南宋郊壇下官窯址出土陶片（収蔵番号 TG-2301、TG-2294）が挙げられる。ほかには、京都市陶磁器試験所研究員であった水町和三郎氏によって採集された肥前古窯址出土陶片（「水町陶片」G-4861）、蜷川第一氏らによって採集された御室仁清窯址出土陶片（「御室陶片」G-4867）などがある。これらは、陶磁器研究者の間では比較的その存在が知られているものの、展示に出される機会は限られており、一般鑑賞者には十分な認知を得ているとはいえない。

そして、後者の一群について。東博構内には、昭和6年（1931）に帝室博物館（当時）の陶磁器担当研究員・北原大輔氏が、肥前地域で地元陶芸家・

中島茂人氏（故中島宏氏の父）の助力を得て採集、輸送した陶片が保管されている。これらは輸送後長らくそのままに、正規の所属を得ないまま保管されてきたが、近年、収蔵庫の移動作業にともない、約1世紀ぶりに開梱し、整理作業に着手している。量にして、当時の古いリング箱約200箱に及び、箱の札には現在では使われていない古い地名や古窯址名が記載されたものも含まれ、戦後体系的に整理されてきた窯址調査とは異なった様相であることがうかがえる。

本発表では、こうした東博の陶片資料を紹介しながら、シンポジウムのテーマである「展示」に即し、これからの陶磁器展示のひとつの形として「陶片資料の活用」を掲げたいと考える。陶片資料の展示を通して、一般鑑賞者へ広くその魅力を伝えていくとともに、さらなる陶磁器研究の進展にも寄与することが期待され、ミュージアムにおける陶片資料のあり方について、課題を共有する機会としたい。